

序章——フォークランド戦争とは何だったのか？

はじめに

フォークランド戦争は、フォークランド諸島（アルゼンチン側の呼称はマルビナス諸島）の領有をめぐって 1982 年 3 月中旬から 6 月中旬までの約 3 ヶ月にわたって、イギリスとアルゼンチンの間で戦われた戦争である。

フォークランド諸島は 2 つの大きな島（西フォークランド島及び東フォークランド島）と小さな島約 200 から構成され、およそ西経 60 度、南緯 50 度付近に位置する。東西約 260km、南北約 140km の広がりを持つ¹。

イギリス本国からフォークランド諸島へは約 13,000 km、中継地となったアセンション島からも約 6,000 km と、相当の距離がある。また、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスから約 1,900 km、同国の最も近い空軍基地からも約 700 km の隔たりがある。

この諸島の総面積は約 12,000 平方 km（新潟県とほぼ等しい）で、最高地点は東フォークランド島のアスポーン山で標高 705 メートルである。土地の多くは、泥炭地あるいは岩石地であり、身を隠すような樹木は殆どない。これは、徒歩での行軍が極めて困難なことを示唆する。また、人口は希薄（フォークランド戦争時には約 200 名の住民しかいなかった）で、道路も首都スタンリー周辺を除けば殆ど整備されていないため、軍事車両などを持ち込んだとしても、あまり意味がなかった。

フォークランド諸島の気候は、比較的高緯度に位置しているため冷涼であるものの、大洋中の島嶼のため極端な高温あるいは低温にはならない。降水量は多くないものの、1 年を通じて雪が降る場合もあり、冬の時期には強風が吹く。実際、フォークランド戦争は、6 月から冬を迎えることを見越しての戦いであった。

第 1 節 フォークランド戦争に至るまでの歴史的背景

最初にこの戦争の背景であるが、フォークランド諸島には大規模な軍事基地などは存在せず、主要産業である牧羊業のための牧草地が広がるが、その多くはいわゆる不在地主の所有である。住民の大多数はイギリス系植民者であるが、その人口は 1931 年のピーク時でも 2,392 人であった。つまり、島の産業は前述の牧羊業を別とすれば漁業ぐらいしかなく、収入は羊毛の輸出に頼るだけであり、イギリス本国からの定期便もなかった。また、社会のインフラはアルゼンチンに完全に依存していた²。

¹ フォークランド諸島から南東に約 1,300 km に南ジョージア島、そこからさらに 736 km のところに南サンドウィッチ諸島がある。これら諸島は、イギリスが 1908 年に併合していた。だが、1977 年にアルゼンチンは南サンドウィッチ諸島の南スーリー島に軍隊を駐留させ、以来それを維持していた。マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』[Margaret Thatcher, *The Downing Street Years* (London: HarperCollins, 1993)] 日本経済新聞社、1993 年、上巻、221 頁、222 頁。

² *Britain and the Falklands Islands* (London: HMSO, 1993), pp. 2- 3, 17- 23, 27- 29; Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. I [The Origins of the Falklands War] (London: Routledge, 2005),

その一方で、フォークランド諸島は 1914 年にパナマ運河が開通するまでは、大西洋と太平洋を結ぶマゼラン海峡及びビーグル海峡に近い戦略上の要衝であった。また、第一次世界大戦及び第二次世界大戦で東フォークランド島のスタンレーは、イギリス海軍にとっての重要な給炭港あるいは兵站基地として機能した。実際、第一次世界大戦でイギリス海軍は、ドイツ東洋艦隊と「フォークランド沖海戦」を戦っている³。

フォークランド諸島の帰属をめぐるのは、1833 年から実効支配してきたイギリスと、独立後のスペインからの継承権を主張するアルゼンチンの間で長年にわたって対立が続いていた⁴。もちろんイギリスに限らずあらゆる国家にとって、たとえ境界の地であっても自国領土に対する侵害は妥協が許されない問題であるが、「帝国」という特殊な勢力圏を築いてきたイギリスにとって、フォークランド諸島の放棄は十分にあり得る選択肢であった⁵。なぜなら、同諸島はイギリス本土からあまりにも遠く離れ過ぎており、それを維持するためには莫大な資本が必要とされたからである。

詳しくは本論の第 1 部で述べるが、1966～82 年の間に断続的に続けられた両国の交渉は、民族自決を主張するイギリス側と、反植民地主義あるいは脱植民地主義を主張するアルゼンチン側が互いに折り合わないまま停滞した。

こうした中、イギリス国防省はフォークランド諸島の防衛には極めて消極的で、殆ど唯一の防衛手段とも言える哨戒艦ですらその退役を検討していた。一方、外務連邦省はアルゼンチンを刺激しない範囲で同国を抑止する目的で、中途半端とでも言うべき艦艇増派案を示していたものの、国防省側はその案には反対であった。もちろん、国防省が増派案に反対した理由の一つは、勝てる見込みのない戦争に巻き込まれることに対する懸念であった⁶。確かに、フォークランド諸島の防衛には少数のイギリス海兵隊と前述の哨戒艦 1 隻が存在するだけであり、それ以外は同諸島防衛隊（民兵）によって担われていた⁷。そして、こうした状況下でアルゼンチンの侵攻を阻止することなど、殆ど不可能に近かったのである⁸。

当時のイギリス首相マーガレット・サッチャー（保守党）の前任者であるジム・キャラハンの労働党政権下では、フォークランド諸島の防衛のために原子力潜水艦 1 隻及び駆逐艦 1 隻を周辺海域に派遣することが決定されたが、自国経済の逼迫とイギリス通貨であるポンドの急落に悩まされていた同政権は、アル

p. 2.

³ 実際、サッチャーはフォークランド戦争を通じてアメリカに対して、仮にパナマ運河がどこかの国に閉鎖された場合のいわば代替策として、フォークランド諸島の戦略的価値を強調している。マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993 年、上巻、279 頁。

⁴ Lawrence Freedman, *Britain and the Falklands War* (London: Blackwell, 1998), pp. 14- 28.

⁵ 三浦瑠麗著『シベリアンの戦争——デモクラシーが攻撃的になるとき』岩波書店、2012 年、111 頁。なお、第 1 節及び第 2 節の記述は三浦の著作に負うところが大きい。

⁶ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign, Vol. I [The Origins of the Falklands War]* (London: Routledge, 2005), pp. 95- 98. 三浦瑠麗著『シベリアンの戦争——デモクラシーが攻撃的になるとき』岩波書店、2012 年、113 頁。

⁷ 通常、フォークランド諸島に駐屯していたイギリス海兵隊分遣隊(Royal Marines Detachment)は約 40 名であったが、アルゼンチンが同諸島に侵攻した時は 69 名であった。また、島民の志願者からなるフォークランド諸島防衛隊(Falkland Islands Defence Force)には、当時、23 名が志願していた。

⁸ 三浦瑠麗著『シベリアンの戦争——デモクラシーが攻撃的になるとき』岩波書店、2012 年、113 頁。

ゼンチンが1977年にフォークランド諸島の属領南サンドウィッチ諸島の南スーリー島を占領した際にも、何ら行動を起こすことはなかった⁹。

さらにサッチャー政権（1979年5月発足）下でも、アルゼンチンがフォークランド諸島に侵攻するまでは、むしろこの問題に対して冷淡であった。同政権のピーター・キャリントン外相は、アルゼンチンの主権を認めた上で期限を定めてイギリスへ行政権を移譲してもらおうという「リースバック」方式の可能性を模索していた¹⁰。サッチャーはキャリントンほど主権の移譲に積極的ではなかったものの、香港からの移民を念頭に置いた移民規制政策との整合性のために¹¹、フォークランド島民の一部に対してイギリス本国への移住及び市民権の付与を制限する方針を採った。また、外務連邦省がこれまでフォークランド海域でのプレゼンスのために必要であると主張してきた哨戒艦も、サッチャーの主要な政策であった政府支出削減のあおりを受けて退役が決定されることになる¹²。

第2節 サッチャーとフォークランド問題

フォークランド諸島の領有権をめぐる紛争が勃発した1982年当時、サッチャー政権の支持率は国内政策の行き詰まりから低迷していた一方で、イギリス国内では開戦を求める世論がかなり強かったため、サッチャーは国防相及び外相の慎重論、さらにはイギリスに同情的な立場のアメリカによる説得あるいは仲裁の申し出を拒否して開戦を決定することになる¹³。ここに、いわゆる「スケープ・ゴート」理論の妥当性がうかがえる。

サッチャーにとってこの戦争は、まさに「正義の戦争」であった。また、上陸したアルゼンチン軍に降伏してスタンレーの総督公邸前の地面に腹ばいにさせられたイギリス海兵隊員の写真は、イギリス国内で大きな衝撃をもたらし、同国世論は一気に戦争へと傾いたのである¹⁴。

3月31日の首相官邸、国防省、外務連邦省の高官による緊急会議で、ノット国防相は、フォークランド諸島が一旦占領されれば軍事力で奪還することなど不可能であると進言した。だが、サッチャーは機動部隊の派遣を決定すると共に、アルゼンチンが実際にフォークランド諸島に侵攻した場合には軍事力による奪還以外にあり得ないと明言する¹⁵。ノット、そしてウィリアム・ホワイトロー内務相に代表される慎重

⁹ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. I [The Origins of the Falklands War] (London: Routledge, 2005), pp. 113-123. 三浦瑠麗著『シビリアンの戦争——デモクラシーが攻撃的になるとき』岩波書店、2012年、113頁。

¹⁰ 三浦瑠麗著『シビリアンの戦争——デモクラシーが攻撃的になるとき』岩波書店、2012年、113頁。

¹¹ Lawrence Freedman, “Writing Official History: The Falklands Campaign” (2009年5月、防衛省防衛研究所主催セミナーでの発表論文) ; Lawrence Freedman, “Airpower and the Falklands War” (2009年5月、防衛省防衛研究所主催セミナーでの提出論文) ; Lawrence Freedman, “Writing Official History: The Falklands Campaign” 防衛省防衛研究所編『戦史研究年報』第13巻 (2010年3月)。

¹² Hugh Bicheno, *Razor's Edge: The Unofficial History of the Falklands War* (London: Phoenix, 2007), pp. 66-67. 三浦瑠麗著『シビリアンの戦争——デモクラシーが攻撃的になるとき』岩波書店、2012年、113～114頁。

¹³ Lawrence Freedman, *Britain and the Falklands War* (London: Blackwell, 1998), pp. 29-44. 三浦瑠麗著『シビリアンの戦争——デモクラシーが攻撃的になるとき』岩波書店、2012年、114頁。

¹⁴ マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、218～264頁。三浦瑠麗著『シビリアンの戦争——デモクラシーが攻撃的になるとき』岩波書店、2012年、114頁。

¹⁵ マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、226頁。

派は、アメリカの支持を得られなかった 1956 年のスエズ紛争の記憶、そして、イギリス軍に多数の犠牲者が出る可能性が高いと考えられるため、軍事力による奪還の方針には反対であった。ノットは同夜、サッチャーに直談判を試みたが説得に失敗、逆に機動部隊の派遣に合意させられることになる¹⁶。

軍事力によるフォークランド諸島の奪還は可能かとのこの緊急会議でのサッチャーの問いに対して、ヘンリー・リーチ第一海軍卿は、正義の観点から奪還が必要であると、さらには、数ヵ月あれば必ず奪還可能であると述べたが、サッチャーは直ちにこの見解に同意したとされる¹⁷。その結果、ノットやキャリントン、そしてキャリントンの後任の外相フランシス・ピムらがあくまでも軍事力による奪還に消極的であったのに対して、リーチが積極的であったことがサッチャーの開戦決定に大きな影響を及ぼしたとの説が、後年、広く信じられた。だが、ここで結論だけを述べれば、開戦への決断は、当初から軍事力による奪還を求めるサッチャーの強力なリーダーシップの下で進められていたものであり、必ずしもリーチの助言がサッチャーの決断に影響を及ぼしたとは言えない¹⁸。

つまり、確かにサッチャーは三軍参謀長でもなく内閣の防衛問題関連の委員会の構成員ですらないリーチを、フォークランド諸島をめぐる紛争の解決のための軍事顧問として重用したが、その一方で、リーチの言動とサッチャーの開戦への決断を短絡的に結び付けることは許されないのである¹⁹。

だが、別の見方をすれば、それほどまでにサッチャーは追い詰められていたのである。実際、ローレンス・フリードマンが公刊戦史の中で繰り返し示唆しているように、フォークランド諸島を軍事力で奪還する準備を既に始めていることをイギリス国民に対して示せなければ、サッチャーは与野党双方からの批判によって首相を辞任していたであろう²⁰。

先にも少し触れたように、この戦争の争点となったフォークランド諸島の領有についてアルゼンチンは、旧宗主国であるスペインによる先占、19 世紀以前の実効支配、そして、そのスペインから独立したアルゼンチン（ラプラタ地方政府連合）の同諸島に対する継承権を主張すると共に、19 世紀以降のイギリスによる不法占拠を非難する。

これに対してイギリスは、初めて入植を行って以来の歴史的経緯と 19 世紀以降の実効支配の正当性を主張する。イギリスにとってフォークランド諸島は、大西洋と太平洋を結ぶ南アメリカ大陸南端のマゼラン海峡を扼するため、そして、南極大陸への中継地として、簡単には手放せない戦略上の要衝であった。

¹⁶ マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993 年、上巻、226～227 頁。三浦瑠麗著『シベリアンの戦争——デモクラシーが攻撃的になるとき』岩波書店、2012 年、116 頁。

¹⁷ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. I [The Origins of the Falklands War] (London: Routledge, 2005), p. 209. マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993 年、上巻、226～227 頁。

¹⁸ Max Hastings, Simon Jenkins, *The Battle for the Falklands* (New York: W. W. Norton & Company, 1997), pp. 79- 80; G. M. Dillon, *The Falklands, Politics and War* (London: Macmillan, 1989), pp. 130- 167. 三浦瑠麗著『シベリアンの戦争——デモクラシーが攻撃的になるとき』岩波書店、2012 年、117 頁。

¹⁹ 三浦瑠麗著『シベリアンの戦争——デモクラシーが攻撃的になるとき』岩波書店、2012 年、117 頁。

²⁰ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. I [The Origins of the Falklands War] (London: Routledge, 2005), pp. 216- 227. サッチャー自身も同様に考えていたようである。マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993 年、上巻、248 頁。

また当時、周辺海域で海底油田の存在が確認されたこともあり、イギリスの支配努力は一層強固なものとなっていた²¹。

確かに、1833年以降のフォークランド諸島はイギリスの領有の下で「平和」を維持していた。イギリスの同諸島の領有権主張の根拠はこの事実によるところが大きい。だがアルゼンチン側は、まさに1833年のイギリスによる「侵略」行為、及びその後の不法占拠の継続を問題にしていたのである。

フォークランド問題の解決をめぐるのは、第二次世界大戦後の1960年12月14日に国連総会で採択された「植民地独立付与宣言」に基づき、アルゼンチンは同年に直ちに「マルビナス」を領有するイギリスに対する植民地放棄要求を国連に訴えた。これを受けて1965年、国連総会はアルゼンチンとイギリスとの間の平和的解決を勧告している²²。

この問題をめぐってアルゼンチンとの外交交渉に臨んだイギリス政府の方針は、「島民の判断に委ねる」——民族自決——というものであったが、現実には、アルゼンチンへの帰属を望む島民——その殆どがイギリス系——などいなかった（2013年に実施された島民に対する住民投票^{レファレンダム}でも結果は同じである）。

実は、こうしたイギリスの基本的な姿勢には、ジブラルタルなどのイギリスが保有する他の海外領土及び権益に問題が波及するのではないかとの同国の懸念が認められる。つまり、イギリスはフォークランド諸島での同国の主権の保全を自助努力で達成している事実を示すことにより、ジブラルタル、キプロス、そしてベリーズなど、イギリスの海外領土及び権益への侵害行為に対する抑止となると期待していたと思われる。

さかのぼって1976年2月、イギリスはフォークランド諸島の防衛について検討していたが、基本的に同諸島に対するアルゼンチン軍の侵攻を阻止することは極めて困難と評価されたため、当初からの諸島の防衛ではなく、侵攻された後の諸島の奪還作戦に重点が置かれ始める。その結果、アルゼンチン側が侵攻した後の奪還作戦との想定が、その後のフォークランド諸島の防衛を検討する際のいわば前提条件となったのである²³。

また1982年3月19日、フォークランド諸島での本格的な戦いが始まる直前に、南ジョージア島へアルゼンチンの「民間業者」が上陸したことに對して、イギリスは艦艇を派遣したものの、表面的には穏便な対応に終始したが、これが、アルゼンチン大統領ガルティエリに誤ったシグナルを送ることになったようである²⁴。

²¹ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. I [The Origins of the Falklands War] (London: Routledge, 2005), pp. 1- 16; Lawrence Freedman, *Britain and the Falklands War* (London: Blackwell, 1998), pp. 14- 28.

²² 1965年12月16日の国連総会決議第2065号は、「いかなる形態の植民地主義も終結させるため」、アルゼンチンとイギリスの双方が平和的な問題解決のため交渉を開始するよう勧告している。Lawrence Freedman and Virginia Gamba-Stonehouse, *Signals of War* (London: Faber and Faber, 1990), p. 8.

²³ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. I [The Origins of the Falklands War] (London: Routledge, 2005), pp. 54- 64.

²⁴ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. I [The Origins of the Falklands War] (London: Routledge, 2005), pp. 168- 183. 南ジョージア島でのアルゼンチン側の強硬姿勢に驚いたイギリスは、偶発的な戦闘による危機の拡大を防ぐため、同地に派遣した哨戒艦「エンデュアランス」を同島沖に待機させ、状況

興味深いことに、3月31日時点でのイギリス合同情報委員会（JIC）の見解は「アルゼンチンは南ジョージア問題を逆手に取って（フォークランド問題の——訳者注）交渉の材料にしようとしている」との楽観的なものであり、アルゼンチンによるフォークランド諸島侵攻の可能性については殆ど考えていなかった²⁵。そして実際、アルゼンチンはこの南ジョージア島での危機を口実としてフォークランド諸島を占領しようとしたのであった²⁶。

だが戦後、アルゼンチンの侵攻を許したことをめぐり、フランクス卿を委員長とする諮問委員会が設置され、フォークランド戦争に対するサッチャーの政治責任について検証が行われたが、この「フランクス報告書」の結論は「侵攻を予測することは不可能であり、また、仮に事前策を取ったとしてもアルゼンチンの侵攻を抑止できたかどうか疑問である」というものであった²⁷。

こうして本格的な戦いが始まることになるが、イギリスが軍事力行使に踏み切った際に国連の場で主張したのは、同国の主権の侵害に対する自衛権の発動であり、その根拠を国連憲章第51条に求めている。さらにイギリスは、国連安全保障理事会から決議第502号を引き出すことに成功し、アルゼンチン軍のフォークランド諸島からの即時かつ無条件の撤退を国際社会に認めさせ、イギリスの自衛行動に正当な保証を得ることになった²⁸。これが成功した背景には、イギリスの主張が現状維持や自助といった当時の国際関係を律する原則あるいは慣行に則している、国際社会からその正当性が認められた事実があったと思われる。

従来イギリスは、第1に、南アフリカのサイモンズタウン海軍基地、第2に、バミューダ諸島にある海軍基地、そして第3に、哨戒艦によるフォークランド諸島の防衛を構想していた。当初、この第3の任務を担当する哨戒艦は「プロテクター」であったが、その後は「エンデュアランス」に引き継がれた。だが、1981年の「国防見直し（The Way Forward）」の結果、この哨戒艦という最低限の「^{トリップ・ワイヤー}導火線」が失われることになる²⁹。また、周知のように第1のサイモンズタウン海軍基地は、既に1974年11月に閉鎖さ

を見守ることにした。イギリスが恐れたのはここでの戦闘行為がフォークランド諸島に飛び火することであり、それ故、この問題をどうにか外交的に解決しようと試みた。マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、225頁。

²⁵ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. I [The Origins of the Falklands War] (London: Routledge, 2005), p. 206. マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、223頁、226頁。イギリスからすれば、仮にアルゼンチンがフォークランド諸島を侵攻するとしても、その前にアメリカの了解を取り付けておくであろうと考えられた。そして、仮に同国がアメリカにその旨を伝えれば、直ちにアメリカからイギリスに伝わるであろうと想定していた。

²⁶ Martin Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas': The Argentine Forces in the Falklands War* (London: Penguin Books, 1990), pp. 10, 13.

²⁷ Lord Franks *et al*, *The Franks Report: Falkland Islands Review* (London: HMSO, 1983), pp. 73-74.

²⁸ 4月3日、国連安全保障理事会は賛成10、反対1（パナマ）、棄権4（スペイン、ポーランド、ソ連、中国）で安保理決議第502号を採択し、フォークランド諸島からのアルゼンチンの即時かつ無条件撤退を勧告した。Lawrence Freedman and Virginia Gamba-Stonehouse, *Signals of War* (London: Faber and Faber, 1990), pp. 134-141. この国連でのイギリスの外交的勝利によって、フォークランド戦争は、脱植民地化をめぐる問題ではなく、国際秩序をめぐる問題として認知されることになる。そして、ポスト植民地主義時代におけるイギリスの失敗例としてではなく、自由、国家の威信、そして国際的安定をめぐる問題として捉えられたのである。G. M. Dillon, *The Falklands, Politics and War* (London: Macmillan, 1989), pp. 132, 134-135.

²⁹ イギリス本土及び「大英帝国」が第二次世界大戦以降に抱えていた安全保障問題について詳しくは、J. Baylis, *British Defence Policy: Striking the Right Balance* (London: Macmillan, 1989); Michael Howard, *The Continental*

れており、1976年には、第2のバミューダ諸島のイギリス西インド艦隊も、独立した司令部機能を失っていた³⁰。

そして、イギリスに最後に残された防衛策が、同国本土とフォークランド諸島のほぼ中間に位置するアセンション島の運用によるものであった³¹。

第3節 イギリスの対応

4月2日のアルゼンチンによるフォークランド諸島侵攻に対する当初のイギリスの反応は、外交的対応——時間稼ぎとの説も根強いが——と、海軍機動部隊及び上陸部隊を直ちに派遣するという、外交及び軍事の2つであったが、機動及び上陸部隊には、イギリス海軍が保有するほぼ全ての水上艦艇と潜水艦が含まれていた³²。こうしたイギリスの迅速な初動は、高い評価に値しよう。

一方、外交面でフォークランド戦争をめぐる争点としてイギリス政府と同国世論が最も重視及び強調した点は、自らの領土が、全く挑発のないところでの侵略行為によって侵されようとしている事実であった。より具体的には、フォークランド諸島民の民族自決権、紛争を解決する手段として軍事力を行使することの不当性、国連憲章第51条の下での自衛権という固有の権利、侵略を成功させないことの重要性、軍政権そのものや軍事侵攻に対する制裁の必要性、そして、イギリスの名誉の問題であった³³。

そして、こうしたフォークランド戦争に際してイギリスの指導者に歴史的類推^{アナロジー}として大きな影響を及ぼしたのが、1938年のミュンヘン会談と1956年のスエズ紛争（第二次中東戦争）であった³⁴。

1938年のミュンヘン会談とは、ドイツにとって第一次世界大戦（あるいはヴェルサイユ体制）の負の遺産を清算するための外交方針の一つの表明であり、ヒトラー及びナチス・ドイツの台頭に対するイギリスの宥和政策をその特徴とする³⁵。だがその後、ドイツの要求がさらに過大となり、第二次世界大戦を阻止で

Commitment: The Dilemma of British Defence Policy in the Era of the Two World Wars (London: Prometheus Books, 1972)などを参照。

³⁰ Geoffrey Sloan, “The Geopolitics of the Falklands Conflict,” in Stephen Badsey, Rob Havers, Mark Grove, eds., *The Falklands Conflict Twenty Years On: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p. 25.

³¹ Geoffrey Sloan, “The Geopolitics of the Falklands Conflict,” in Stephen Badsey, Rob Havers, Mark Grove, eds., *The Falklands Conflict Twenty Years On: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p. 25. だが、フォークランド諸島はイギリス本土から13,000km、前進基地となったアセンション島から6,000kmも離れていた。確かにアセンション島を離陸してから何度も空中給油を行うことで、大型の爆撃機、哨戒機、輸送機などはフォークランド諸島へ到達できたが、機動部隊への継続した防空態勢の提供、そして、陸上での戦いにおける航空優勢の確保及び密接な航空支援を考えると、航空母艦なしで奪還作戦は成立し得なかった。

³² サッチャーが最初に原子力潜水艦を派遣した理由の一つは、アルゼンチン側にイギリスの断固とした態度を示すための政治的計算からであった。マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、225頁。

³³ Lawrence Freedman, “The Impact of the Falklands Conflict on International Affairs,” in Stephen Badsey, Rob Havers, Mark Grove, eds., *The Falklands Conflict Twenty Years On: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p. 9. マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、218頁。

³⁴ Paul Latawski, “Invoking Munich, Expiating Suez: British Leadership, Historical Analogy and the Falklands Crisis,” in Stephen Badsey, Rob Havers, Mark Grove, eds., *The Falklands Conflict Twenty Years On: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), pp. 226-228.

³⁵ イギリスの宥和政策については、P. Kennedy, “The Tradition of Appeasement in British Foreign Policy” in P. Kennedy, *Strategy and Diplomacy* (London: Harpercollins, 1989); P. Kennedy, *The Realities behind Diplomacy*:

きなかったことから、イギリスの政治指導者は、独裁者は絶対に宥和できないとの「教訓」を学んだとされる。実際、アルゼンチンがフォークランド諸島への侵攻を開始した直後のイギリス議会内では、ネヴィル・チェンバレン（ミュンヘン会談での宥和政策の推進者）の辿った不幸な運命や、逆にウィンストン・チャーチルの発した勇ましい言葉が飛び交っていたという³⁶。

一方、1956年のスエズ紛争は、ナセル率いるエジプトのスエズ運河国有化に対してイギリスとフランスが共謀して介入したものであり、イスラエルもこれに加わったが、この介入はアメリカ及びソ連の強い「恫喝」により失敗に終わった³⁷。例えば、アメリカはイギリスの通貨であるポンドを売り込んで暴落させることにより、停戦するようイギリスに圧力を掛けた。

実際、ノットが後に回想しているように、フォークランド諸島をめぐる問題を解決する際に常に彼の念頭にあったのは、スエズ紛争での失敗であった³⁸。イギリスはこの紛争をめぐる失敗から、たとえ純粋な軍事作戦が成功しても、国内、英連邦諸国、そして EC 及び西側諸国の世論がイギリスに賛同しない限り、目的を達成することなど不可能であると理解したのである³⁹。

実際、サッチャー自身もスエズ紛争の経験から 4 つの「教訓」を導き出したとされる⁴⁰。すなわち；

- ①我々は決然としていない限り、そして、終結させる自信がない時には軍事作戦を行ってはならない。
- ②イギリスの国益に影響を及ぼす主要な国際的危機において、二度とアメリカをイギリスの反対側に回してはならない。
- ③我々は、我々の行動が国際法に則っているか確認しなくてはならない。
- ④躊躇する者は敗北する。

スエズ紛争後、イギリス国内では軍事力行使に対して後遺症あるいは賛否が相半ばする感情が強かった事実を考えると、スエズ紛争の遺産、とりわけその負の遺産を同国が克服するためにフォークランド戦争が果たした役割は大きい⁴¹。事実、あるイギリス政府高官は「フォークランド戦争はスエズでの屈辱を悪魔祓いしてくれた」と述べたほどである⁴²。また、ノットも「スエズは大失敗であった。だがフォークラ

Background Influence on British External Policy 1865-1980 (London: Routledge, 1981) を参照。

³⁶ G. M. Dillon, *The Falklands, Politics and War* (London: Macmillan, 1989), p. 137.

³⁷ スエズ紛争でのイギリス、フランス、そしてイスラエルの共謀については、1980年代中頃に公開されたイギリス公文書によってその全貌が明らかになった。詳しくは、D. Carlton, *Britain and the Suez Crisis* (New York: Blackwell, 1988); W. M. R. Louis, R. Owen, eds., *Suez 1956: The Crisis and its Consequences* (Oxford: Oxford University Press, 1989); K Kyle, *Suez* (London: St. Martin's Press, 1991) を参照。

³⁸ John Nott, *Here Today Gone Tomorrow: Recollections of an Errant Politician* (London: Politico's, 2002), p. 247.

³⁹ Paul Latawski, "Invoking Munich, Expiating Suez: British Leadership, Historical Analogy and the Falklands Crisis," in Stephen Badsey, Rob Havers, Mark Grove, eds., *The Falklands Conflict Twenty Years On: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p. 228.

⁴⁰ Margaret Thatcher, *The Path to Power* (London: HarperCollins, 1995), p. 88.

⁴¹ マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、218頁。

⁴² Nigel Lawson, *The View from No. 11: Memoirs of a Tory Radical* (London: Bantam, 1992), p. 161, quoted in Peter Hennessy, "War Cabinetry: The Political Direction of the Falklands Conflict," in Stephen Badsey, Rob Havers, Mark Grove, eds., *The Falklands Conflict Twenty Years On: Lessons for the Future* (London: Frank Cass,

ンドは大勝利であり、イギリス国民の自信を回復するために大きく役立った」と回想している⁴³。

第4節 アルゼンチン側の思惑、そして誤算と誤解

一方、フォークランド戦争以前のアルゼンチンでは1976年のクーデター以降、軍事政権が続いていたが、ガルティエリが1981年12月に新たなクーデターで権力を掌握していた。そして、このガルティエリ政権は、政治的求心力を得るためにアルゼンチン国民の支持が高いマルビナス（フォークランド）諸島の奪還を計画し、実行に移したとされる。アルゼンチン側の史資料が乏しくこれを実証することは困難であるが、また、「スケープ・ゴート」理論の妥当性については慎重であることが求められるが、フォークランド戦争におけるアルゼンチンの行動を見る限り、この理論にはかなりの説得力があるように思われる。

そしてどうやらアルゼンチン側は、イギリスが1833年にフォークランド諸島を実効支配し始めてから150周年の時期に合わせてこの諸島の「統合」を考えていたようである。理想的な日程は、アルゼンチン独立記念日である7月9日、すなわち1982年の7月9日に侵攻を開始するというものであった。

また、この紛争に当たってアルゼンチンは、結局はイギリスがフォークランド諸島を諦めるであろうと誤解していたようである。実際、4月2日以降、アルゼンチン側がフォークランド諸島へのイギリスの軍事力行使を予測していなかったことは明らかである⁴⁴。そのためアルゼンチンは、イギリスの反攻に対する具体的計画は一切持ち合わせておらず、また、国際社会がイギリスに批判的になるであろうことを期待する以外、どのようにしてイギリスの侵攻を阻止するかについて殆ど対策を考えていなかった。

さらにアルゼンチン側は当初、フォークランド諸島の占領が平和的かつ流血を伴わないものであると国際社会に対して意識的に示そうとしたが、こうした試みは直ちに失敗した。なぜなら、前述したようにスタンレーのイギリス海兵隊隊舎が破壊され、同隊員が屈辱を受けている写真が島から密かに持ち出されたからである。メディアによるこの写真の公表が、イギリス世論を一気に戦争へと駆り立てたのであるが、この事例こそ、アルゼンチンが政治及び高次の軍事の領域を、低次の作戦と結び付けることに失敗した最初であり、結局はフォークランド戦争の最終的な敗北につながるようになった⁴⁵。

加えて、アルゼンチンはこの戦争を通してアメリカが自国に好意的であろうと過大に期待した。と言うのは、アルゼンチンは冷戦という当時の戦略環境の下、中央アメリカ及び南アメリカ大陸での反共産主義

2005), p. 234.

⁴³ Sir John Nott, "Defence and the Suez Factor," *The Times*, 6 November 1986, quoted in Peter Hennessy, "War Cabinetry: The Political Direction of the Falklands Conflict," in Stephen Badsey, Rob Havers, Mark Grove, eds., *The Falklands Conflict Twenty Years On: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p. 234.

⁴⁴ フォークランド諸島侵攻に際してのアルゼンチン側の指示は、「マルビナス諸島を奪還せよ。但し、それを確保する必要はない」というものであり、明らかにこれは、イギリスは反撃してこないという前提の下での指示であった。詳しくは、Martin Middlebrook, *The Fight for 'Malvinas': The Argentine Forces in the Falklands War* (London: Penguin Books, 1990), p. 1 を参照。

⁴⁵ Stephen Badsey, "The Falklands War: Politics and Strategy" (2011年11月15日、防衛省防衛研究所主催セミナーでの発表論文) ; Stephen Badsey, "The Falklands War: Strategy and Operations" (2011年11月16日、防衛省防衛研究所主催セミナーでの発表論文) ; Stephen Badsey, "An Overview of the Falklands War: Politics, Strategy and Operations" 防衛省防衛研究所編『戦史研究年報』第16巻(2013年3月)。

を掲げるアメリカの重要な同盟国であったからである⁴⁶。実際、アルゼンチンは1961年にインドがポルトガル領ゴアを占領した時と同様、結局はアメリカが新たな「現状」を追認するであろうと期待していたのである。

確かに、アルゼンチンは中央及び南アメリカ諸国に対共産主義ゲリラのための軍事顧問を多数派遣することにより、アメリカの反共政策を支持していたため、同国の政治及び軍事指導者の多くは、アメリカとの「特別な関係」を自負していた。ガルティエリも、仮にイギリスと戦争になったとしてもアメリカが強硬に介入する可能性は低いであろうと楽観視していた。だが、周知のようにイギリスもまた、アメリカとの「特別な関係」を自負していたのである。

また、フォークランド戦争を通してアルゼンチンは、サッチャーがガルティエリを打倒するために意識的に戦争へと引き摺り込んだ、あるいは、サッチャーが自らの政治生命を守るために戦争へと引き摺り込んだと主張した。「スケープ・ゴート」理論であるが、やはりこうした主張には殆ど根拠が見出せない反面、確かに、イギリスが本格的な戦いに突入する前に明確な警告を含んだ最後通牒をアルゼンチン側に発しなかった事実は、今でも「謎」とされている⁴⁷。

以上、ガルティエリが紛争の解決策として期待したのは、冷戦構造下におけるソ連を含めた東側陣営、フォークランド諸島を歴史的に先有していた旧宗主国スペイン、アメリカやイギリスと距離を置きながらアルゼンチンへ兵器を輸出しているフランス、そして、南北アメリカ大陸の同盟国である米州機構(OAS)諸国が、イギリスを国際社会の共通の敵として批判する一方で、アルゼンチンを支持し、いずれは調停に乗り出してくるというシナリオであった。

しかしながら、結局アメリカはNATO(北大西洋条約機構)の同盟国で外交的にも親密なイギリスを支持することを宣言し、その他の諸国も基本的にはイギリスとアルゼンチンの二国間の固有の問題として、この紛争から距離を置いたのである。ソ連ですら、この紛争を西側陣営との対決の構図として描くことはなかった⁴⁸。

第5節 イギリスの政治的制約と軍事的制約

以下では、フォークランド戦争を通じてイギリスが抱えていた様々な制約について考えると共に、同国がその制約をいかに克服したかについて分析してみよう。

最初に、政治的な制約についてであるが、イギリスはフォークランド諸島で長期間にわたる戦争を戦うことなど全く考えていなかった。つまり、①水上艦や潜水艦を用いてフォークランド諸島に対して海上封

⁴⁶ 確かに、フォークランド戦争を通じてアメリカは、ガルティエリ政権が倒壊することを望んでおらず、これをイギリス側に伝え続けた。

⁴⁷ 但し、G. M. Dillon, *The Falklands, Politics and War* (London: Macmillan, 1989) などは、イギリスが明確な最後通牒を発していたとの立場を取っている。

⁴⁸ Lawrence Freedman, "The Impact of the Falklands Conflict on International Affairs," in Stephen Badsey, Rob Havers, Mark Grove, eds., *The Falklands Conflict Twenty Years On: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), pp. 20- 21.

鎖を行うこと、②防御の薄い西フォークランド島に最初に上陸すること、あるいは、③当面は東フォークランド島をアルゼンチンの占領下に置くこと、など念頭に入れていなかったのである。

なぜなら、イギリスは国際社会及び国際世論の動向に敏感にならざるを得なかったからであり、国際社会からの圧力が掛かる前にどうしても戦争を早期に決着させる必要があった。イギリスがアルゼンチンに対する長期かつ本格的な経済制裁についてあまり検討しなかったのは、まさにその理由による。

そして、その結果が「迅速性」の重視へとつながるのであるが、一方でイギリスは、一旦、戦争が勃発すれば完全な軍事的な勝利を達成する前に、すなわち、アルゼンチンに現実を甘受させる条件を得る前に停戦することはどうしても避けたかった。だが現実には、イギリスが軍事的に成功すればするほど、戦争を早期に終結させるべきとの国際社会からの圧力が強まったが、皮肉なことに、これが結局イギリスにとって追い風となった。

周知のように、20世紀後半は「パブリック・ディプロマシー」の重要性が高まりつつあった時期である。そして、おそらくフォークランド戦争は、メディアや世論というものを伝統的な外交、あるいは戦略及び作戦と切り離すことが可能と考えられた最後の世代の戦争であった。そのため、イギリス政府には高度のメディア戦略が求められることになったが、総じて同国政府はこれに成功した⁴⁹。例えば4月5日、同国の港から出発する航空母艦「ハーミーズ」及び「インヴィンシブル」の姿がメディアで大きく報じられたが、実はこれは、航空母艦の出港を大々的に宣伝することで、イギリスの決意を内外に示すためのメディア戦略——プロパガンダ——の一環であった。

次に、イギリスが抱えていた軍事的な制約を考えてみよう。

イギリスは1981年の「国防見直し (The Way Forward)」で NATO という共同防衛枠組みの中での自らの任務に重点を置き始めた結果、遠征型あるいは「NATO 域外」での能力の削減、より具体的には海軍、とりわけ水上艦の削減を進めていた⁵⁰。だからこそ、この事実が後年の「フォークランド戦争があと数年後に勃発していたら」との、歴史の「イフ」につながるのである。

この「国防見直し」の結果の一つは哨戒艦「エンデュランス」のフォークランド諸島からの引き揚げ及び退役であったが、この艦は元来、フォークランド諸島及びその属領を防衛する任務だけのものである。

⁴⁹ Stephen Badsey, “The Falklands War: Politics and Strategy” (2011年11月15日、防衛省防衛研究所主催セミナーでの発表論文)；Stephen Badsey, “The Falklands War: Strategy and Operations” (2011年11月16日、防衛省防衛研究所主催セミナーでの発表論文)；Stephen Badsey, “An Overview of the Falklands War: Politics, Strategy and Operations” 防衛省防衛研究所編『戦史研究年報』第16巻 (2013年3月)。

⁵⁰ Ministry of Defence, *The United Kingdom Defence Programme: The Way Forward* (London: HMSO, 1981). 第二次世界大戦後のイギリスは、それまでにも3回にわたる大きな「国防見直し」を行っていた。第1は、1957年のサンディーズによる徴兵制の廃止と核戦力への依存決定、第2は、1960年代中頃のヒーリーによる「スエズ以東」からの撤退決定、そして、第3は、1974～75年のメーソンによる4つの主要な「防衛領域」の特定及びイギリスのヨーロッパ志向の決定であった。石津朋之「英国外交防衛政策を考察する視点」『新防衛論集』第22巻第3号 (1995年3月)。

そしてこの1981年の「国防見直し」の結果、「通常兵器を用いた海上戦力」の優先順位は、①「戦略核抑止」、②「イギリス本土防空」、③「西ドイツ駐留のイギリス陸、空軍による NATO への貢献」、に続く第4番目となり、また、海軍の主たる戦場は東大西洋に限定された。実際、イギリス海軍にとって当時の最優先事項は潜水艦発射弾道ミサイル (SLBM) 「トライデント I」の配備であり、海軍全体の予算が削減される中で他の装備品に関わる経費は削減しなければならなかった。

そのため、結果的にはこの決定が誤ったシグナルをアルゼンチン側に送ることになったようである。そしてこの事例は、1950年に朝鮮戦争が勃発する直前、アメリカがあたかも朝鮮半島が自らの関心外とのシグナルを発したとされる事例——いわゆるアチソン・ライン——と類比できる。戦争におけるパーセプション（認識）の重要性を示すものであり、また、戦争とは当方と相手との作用＝反作用である事実を如実に示す事例である。

政治の次元と同様に軍事の次元でも、イギリスが長期間にわたる戦争を望まなかった背景には多くの理由が挙げられる。

その一つが、南大西洋では冬の時期（フォークランドでは6月から冬）が近付きつつあり、大しけの中、ある程度の港湾設備が整わない状況下で水上艦艇を何週間にもわたって維持することなど不可能、との理由である。とりわけ、こうした環境下で艦艇に装備された重要な電子装置が正常に作動するとは考えられなかった。実際、サッチャーはフォークランド諸島への上陸作戦を行うのであれば、5月16日から30日の間しかないと考えていた⁵¹。

また、長い距離にわたるロジスティクスの問題も大きかった。実際、当時のイギリスにはフォークランド諸島有事の際の緊急作戦計画が存在しただけでなく、「NATO 域外」で1個旅団以上の兵力の運用を兵站支援する計画もなかった。

もちろん、直ちに詳細な作戦計画を立てるための時間的余裕はなく、そもそも信頼に足る情報もなかった。つまり、「迅速性」を重視した結果として機動部隊及び上陸任務部隊は、具体的な作戦計画なしで出発せざるを得なかったのである⁵²。だからこそイギリスは、予想される軍事行動で既に詳細な計画が存在し、かつ、フォークランドに最も類似すると考えられた北部ノルウェーへの大規模展開を参考にしたのである。確かに、この計画を基礎として、さらに11,000kmを移動する点を考慮すれば、いかなる装備品をどれほど持っていけば良いかなど、ある程度の指針となったのである⁵³。

ロジスティクスをめぐるさらなる問題として、世界中のメディアから隔絶され、第三国の政治的な介入から隔離され、かつ、作戦を立案し、軍事物資を集積でき、イギリス本土から運んできた物資を作戦順に積み替える——いわゆる「戦術的積荷 (tactical loading)」——ための中継地がイギリスには必要であった。これについては幸運にも、フォークランド諸島防衛の最後の頼みの綱であったアセンション島が運用でき、実際、戦いが始まるとアセンション島は全作戦の「前哨拠点」として機能したが、それにしても、イギリス本土からの距離、そして、フォークランド諸島までの距離はあまりにも長いものであった。

イギリスが抱えたさらなる軍事的制約は、基盤となる緊急作戦計画がない中——まさに機動部隊は「走りながら」作戦計画を練り上げた——必要な制空権あるいは航空優勢が確保されていない中で戦いを強い

⁵¹ マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、275頁。

⁵² Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. II [War and Diplomacy] (London: Routledge, 2005), p. 50.

⁵³ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. II [War and Diplomacy] (London: Routledge, 2005), pp. 54-55.

られたことであった⁵⁴。同様に、制海権あるいは海上優勢も確保されていなかった。

イギリスはまた、指揮命令系統に問題を抱えていた。例えば、1982年の段階で戦略の次元と戦術の次元を架橋する戦争の「作戦次元（オペレーショナル・レベル）」あるいは「戦域次元」といった概念は、イギリス軍にとってはいまだに比較的新しいものであり、実際、これが同国の軍事ドクトリンとして正式に採用されたのは、1989年以降であった⁵⁵。また、軍事力の統合運用に関して「常設統合司令部」の設立が決定されたのは1994年のことであった。

第6節 戦争指導を考える——「戦時内閣」を手掛かりとして

サッチャーはフォークランド戦争後の1982年7月3日の演説の中で、「我々は、（アルゼンチンの——
記者注）攻撃が成果を収めることなく、盗人が盗品を持って立ち去ることは許されないことを示すために戦いました」と述べている⁵⁶。

実際、前述したように戦争直前の3月31日の会議で、ノットはフォークランド諸島が占領されれば軍事力で奪還することは不可能との見解を示したが、サッチャーは、①直ちに機動部隊を派遣すること、そして、②仮にアルゼンチンが侵攻した場合には軍事力による奪還以外に選択肢はあり得ない旨、を明言している⁵⁷。

そしてサッチャーは、戦争指導を効率的に行うためにいわゆる「戦時内閣」を形成した⁵⁸。この構成員は首相であるサッチャー、国防相のジョン・ノット、新たに外相に就任したフランシス・ピム、内務相のウィリアム・ホワイトロー、サッチャーの政治的盟友であるセシル・パーキンソン（情報担当国務相）、そして、イギリス三軍参謀長のテレンス・ルウィングが「軍事顧問」として参加した。この戦時内閣には交戦規定（ROE）との関連でハーバース法務相が参加することもあった⁵⁹。

戦時内閣の要件あるいは戦争を成功裡に指導する要件として、イギリスでは伝統的に以下の6つの点が挙げられている⁶⁰。

①戦時内閣は、内閣全体と可能な限り密接で継続的な関係を維持すべきである。

⁵⁴ イギリスは、フォークランド諸島有事の際の緊急作戦計画をキャラハン政権下の1977年から、一応は作成していたが、その内容はフォークランド諸島奪還のために必要とされる軍事力の規模の概要に留まり、奪還のための具体的な青写真を提供するものではなかった。詳しくは、Lord Franks *et al*, *The Franks Report: Falkland Islands Review* (London: HMSO, 1983), pp. 12-13, 31-32を参照。

⁵⁵ Stephen Badsey, “The Falklands War: Politics and Strategy” (2011年11月15日、防衛省防衛研究所主催セミナーでの発表論文)；Stephen Badsey, “The Falklands War: Strategy and Operations” (2011年11月16日、防衛省防衛研究所主催セミナーでの発表論文)；Stephen Badsey, “An Overview of the Falklands War: Politics, Strategy and Operations” 防衛省防衛研究所編『戦史研究年報』第16巻(2013年3月)。

⁵⁶ マーガレット・サッチャー首相演説(1982年7月3日)。

⁵⁷ マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、226～227頁。

⁵⁸ G. M. Dillon, *The Falklands, Politics and War* (London: Macmillan, 1989), pp. 130-167.

⁵⁹ マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、237～238頁。

⁶⁰ Peter Hennessy, “War Cabinetry: The Political Direction of the Falklands Conflict,” in Stephen Badsey, Rob Havers, Mark Grove, eds., *The Falklands Conflict Twenty Years On: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), pp. 134-135.

- ②戦時内閣は多くても6名の閣僚から構成されるべきである。外交的であれ軍事的であれ、効率的に戦争指導を行うためには、定期的に会合を持つ必要があり、決定を避けるのではなく、決定を下すことに重きを置く必要がある。
- ③戦時内閣は内閣全体が状況が見えていない状態に置かれることを回避すると共に、あまりにも技術的な事柄で一杯にならないよう配慮すべきである。なぜなら、心理的圧迫を抱えた状態で単一の重要な目的に向かって戦争を指導する少人数の集団にとって、技術的な事柄の過剰な状況は逆効果だからである。
- ④同盟国（あるいは潜在的な同盟国）が必要としているもの、その優先順位、そして、その態度には常に注意を払うべきであり、また、国際組織の政治に対しても常に注意を払うべきである。紛争は、それがどの程度であれ、こうした国際組織によって監視され政治的に解決されるからである。
- ⑤議会、メディア、一般国民に対しては、作戦上の機密という条件があるとは言え、紛争あるいは紛争に近付いている状況について完全かつ正確、そして、時宜を得た開示を可能な限り行うべきである。
- ⑥戦時内閣の構成員である閣僚は、武力紛争の本質とは物を破壊し、人間を殺害することである、と常に銘記する必要がある。そして、その職にある政治家に最も必要とされる義務とは、戦争を回避するためにあらゆる手段を講じることである。それが初期の予防的行動であれ、外交の質であれ、高次の情報活動であれ、である。

興味深いことに、上記の要件及びサッチャーの戦時内閣が示した特徴の第1として、戦時内閣が絶対にやってはならないことは「決断を下さないこと」である、との点が挙げられる。

さらに興味深いことに、サッチャー政権の戦時内閣には財務相が含まれていない。これが第2の特徴として挙げられるが、実はこれは、サッチャーが戦争の遂行あるいはイギリス軍の安全確保のためには、財政上の理由からいかなる妥協の誘惑にも屈してはならないと考えたからである⁶¹。

実際、サッチャーは4月8日のイギリス下院での演説の中で、「私は直ちに決断を下しました。そしてイギリスの自由と名誉の将来が懸っていると述べました。それ故、我々はどれほど費用が掛かるかといった観点からそれ（フォークランド問題——訳者注）を考えてはならないのです」⁶²。これは、今日の日本の一般的な認識とは大きく異なるであろう。すなわち、一般的には戦争の決断には財務相の参加及び判断が不可欠である、と考えると推測される。だが、おそらくここに、真の戦争指導とは何かを理解するための一つの鍵が隠されている。

サッチャーの回顧録などによれば、フォークランド戦争を通じて戦時内閣は、少なくとも1日に1回、時として1日に2回、会議を開いたという⁶³。もちろん、同時にサッチャーは内閣全体のコンセンサスを

⁶¹ マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、238頁。

⁶² G. M. Dillon, *The Falklands, Politics and War* (London: Macmillan, 1989), p. 135.

⁶³ Peter Hennessy, "War Cabinetry: The Political Direction of the Falklands Conflict," in Stephen Badsey, Rob Havers, Mark Grove, eds., *The Falklands Conflict Twenty Years On: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p. 138. マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、238頁。

得ることに細心の注意を払ったようである。

サッチャーの戦時内閣の第3の特徴として、誰が最終的な決断を下すのかといった問題に関連する点が挙げられる。サッチャーの回顧録などによれば、軍事的な決定であっても、そして、たとえそれが難解かつ詳細なものであっても、その最終決定権はサッチャーとその戦時内閣が握っていた⁶⁴。そしてこれは、例えば日本でも今日に至るまで大きな影響を及ぼしているヴェトナム戦争をめぐるハリー・G・サマーズの見解とは全く相容れないものであり、それ故、1991年の湾岸戦争における連合国——有志連合——側の勝因をめぐる評価に対しても新たな一石を投じる事実である。この点については、本論の「おわりに」で詳述する。

では以下では、戦時内閣でのサッチャーのリーダーシップ、すなわち戦争指導について、より具体的に見てみよう。

例えばサッチャーからの強い政治的要請、とりわけ早期にフォークランド諸島での地上での戦いを開始するようにとの要請を受けて、東フォークランド島のサン・カルロスに上陸したイギリス陸軍部隊は、その後、直ちに攻撃を開始することになる。なぜなら、サッチャーはこの時期、イギリスに対する国際社会の支持が低下しつつある事実を理解していたからである。

また、さらなる政治的圧力を受けて選ばれた戦いの場がグース・グリーンであり、本来イギリス軍は東フォークランド島の東側に向かって進撃すべきところを、一部の部隊を南下させてグース・グリーンへの攻撃を開始した。この戦いはイギリス側の勝利に終わったが、こうしたサッチャーの圧力に対しては戦後、多くの批判が寄せられた。

さらに細かく戦時内閣での決定事項を挙げてみれば、サッチャーは、戦時での第1段階の交戦規定(ROE)を定め、派遣部隊に指示している⁶⁵。この交戦規定には、アルゼンチン軍との初期接触への対応として、具体的に指示された作戦が開始されるまでは防衛に徹すること、などが明示されていた。

また、軍事行動全般に関してサッチャーが軍に指示した事項は、①犠牲の局限化、②アルゼンチン本土基地への攻撃の禁止、③政治主導によるフォークランド諸島上陸時期の決定、などであった。

加えて、フォークランド諸島上陸作戦前の南ジョージア島の奪還作戦は、①アルゼンチン空軍機の脅威の及ばない後方策源地の確保、②フォークランド諸島上陸作戦のいわば予行という軍事的位置付け、といった目的もさることながら、③「実力行使も辞さない」というサッチャーの断固たる政治的な意思を明確に示すためのものであった⁶⁶。ノットは後年、南ジョージア島の奪還作戦について、「純粹に政治的なもの」であったと回想している。また、総じてイギリス軍上層部は、この作戦を「政治家の気晴らし」と冷やや

⁶⁴ Peter Hennessy, "War Cabinetry: The Political Direction of the Falklands Conflict," in Stephen Badsey, Rob Havers, Mark Grove, eds., *The Falklands Conflict Twenty Years On: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p. 139.

⁶⁵ 交戦規定とは、その範囲でなら軍部が自らの裁量で作戦上の決定を下して良いという枠組みを、政治家が承認する手段である。マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、254頁。

⁶⁶ マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、254～255頁。

かに見ていた⁶⁷。

また、5月14日、イギリス陸軍特殊部隊（SAS）がペブル島に上陸し、東フォークランド島へイギリスが上陸作戦を実施する際にこれを阻止するであろうアルゼンチン空軍機の発進基地となる空港を破壊した。この際、同空港に駐機していたプカラ機などを破壊したとされるが、実はこれも、イギリスの意志、イギリス軍の能力を知らしめるため、さらには、フォークランド諸島奪還作戦全体での犠牲者の局限化、との強い政治的要請を反映した作戦であった⁶⁸。

イギリスは、多岐にわたる候補の中から東フォークランド島の上陸地点としてサン・カルロスを選んだ。それは、①アルゼンチン側守備兵力が少ないこと、②海岸の地形が上陸に適していること、③アルゼンチン軍の主力が展開するスタンレーから離れており、イギリス軍の橋頭堡が確実に構築できること、④周辺に小高い丘陵があるため、上陸後に効果的な防空陣地が展開できること、などの理由からであったが、ここでもサッチャーの強い政治的要請を受けて上陸部隊が直ちに攻撃を開始したことは前述の通りである⁶⁹。

また、5月28日及び29日のダーウィンからグース・グリーンにかけての攻撃については、①スタンレー攻撃の際の右側背の防衛、②グース・グリーン空港を奪取することにより敵機の活動の阻止、③同空港を利用した兵站基地の確保、④スタンレーへの南ルートの打通、⑤増援部隊が上陸する際の安全の確保、などを目的として実施された。

だが、前述したようにやはりグース・グリーンの戦いも、イギリス艦艇が多数攻撃を受ける状況の下で、同国が戦争に勝利しつつあると国際社会にアピールするための政治的色彩の濃い作戦であった⁷⁰。当初ジュリアン・トンプソン旅団長（海兵隊准将）は、ダーウィンそしてグース・グリーンを本格的に攻撃し、占領する意図など全く持ち合わせていなかった。襲撃——占領を伴わない——を試みようと考えていた程度であった⁷¹。しかしながら、この作戦もまたサッチャーの政治的要請によって実施されたのである。

フォークランド戦争を通じて軍事作戦の遅れは、①国内では、イギリス国民がテレビなどで同国の艦艇が沈没するのを見せ付けられる一方で、陸上での戦いでは何の進展もないとの不満から、政権に

⁶⁷ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. II [War and Diplomacy] (London: Routledge, 2005), p. 226.

⁶⁸ マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、280頁。

⁶⁹ サン・カルロスは、奥深い湾であり艦艇や潜水艦からの攻撃から防御し易かった。また丘陵に囲まれ空からの攻撃に対しても防御し易く、少なくとも停泊地に「エグゾセ」が飛んでくる危険はないと考えられた。また特殊部隊による偵察の結果から、サン・カルロス近辺にアルゼンチン軍が殆どいないことも確認された。こうした点を総合的に判断して、サン・カルロスが上陸地点として選ばれたのであった。Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. II [War and Diplomacy] (London: Routledge, 2005), pp. 448, 452.

⁷⁰ グース・グリーンの戦いは、当初は副次的な作戦と考えられていたが、今やイギリスが主導権を握るための好機と見なされた。ここでの勝利は、①イギリス国民にフォークランドの奪還が明白に進展していることを、②アルゼンチン国民にはイギリスに抵抗し得ないことを、そして、③国際社会には交渉のための停戦に応じる意図がないこと、を示すものと考えられた。フリードマンも同様に、グース・グリーンの戦いは「本来、戦わなくても良かったもの」であったとの見解を示している。Lawrence Freedman, “Writing Official History: The Falklands Campaign” (2009年5月、防衛省防衛研究所主催セミナーでの発表論文)；Lawrence Freedman, “Airpower and the Falklands War” (2009年5月、防衛省防衛研究所主催セミナーでの提出論文)；Lawrence Freedman, “Writing Official History: The Falklands Campaign” 防衛省防衛研究所編『戦史研究年報』第13巻（2010年3月）。

⁷¹ Geoffrey Sloan, “The Geopolitics of the Falklands Conflict,” in Stephen Badsey, Rob Havers, Mark Grove, eds., *The Falklands Conflict Twenty Years On: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p. 28.

対する支持の低下を招き、②国際的には停戦を求める圧力が強まり、最終的には、③イギリスはフォークランド諸島の一部を奪還するだけに終る危険性があったのである⁷²。

明らかにサッチャーは、国際的な圧力によって停戦を選ぶのではなく、アルゼンチンに軍事的に勝利した後には戦争を終結させたいと考えていた。そのため、イギリス軍には、たとえ兵力や装備品が不足していても、攻撃を継続することが求められたのである。

結局、フォークランド諸島での軍事作戦とは、アルゼンチン側の士気の低下と、イギリス軍の疲労との、どちらが先に耐え切れなくなるかの競争と考えられた⁷³。実際、当時のイギリス軍は、冬に向かう天候の悪化、兵士及び装備品の消耗、艦艇やヘリなどの損失、そして伸びきった兵站線など、疲労の極致にあった。他方、この戦争を通じてのアルゼンチン軍の捕虜の多さは、同軍内での士気の低下を如実に物語っている⁷⁴。

こうしてフォークランド戦争は最終的に、6月19日夜にイギリスがアルゼンチン側の守備する南サンドウィッチ諸島チュレ島を攻撃してこれを降伏させることによって終結した。

実は、フォークランド戦争以前にもイギリスにおいてこうした戦時内閣は、第一次世界大戦（ロイド＝ジョージ政権）及び第二次世界大戦（チェンバレン及びチャーチル政権）で、また、その後は1991年の湾岸戦争（メイジャー政権）の際に創設されている。そしてこの組織が、近年のイギリス版国家安全保障会議（NSC）としていわば制度化されたことは記憶に新しい。

一方、アメリカは以前から国家安全保障会議（NSC）という制度を設けてはいたが、2001年の「9.11同時多発テロ事件」を受けて当時のブッシュ大統領は、これとは別にいわゆる戦時内閣的な枠組みを創設し、キャンプデービッドでの会合において「テロとの戦い」を明言することになる。この構成員は、国家安全保障会議の構成員とほぼ同じであったが、やはりこの枠組みの目的も少人数による決定の迅速化であった。

以上、強力なリーダーシップを発揮して、フォークランド戦争を指導したサッチャーであるが、よく考えてみれば、実はこの戦争以前からサッチャーは国内での労働組合との戦いに明け暮れていたのである。また1980年4月、ロンドンのイラン大使館が武装テロリストに占領され、大使館員が人質に取られた際には、サッチャーはSASを行動させることに全く躊躇しなかった。さらに当時からサッチャーは、IRA（アイルランド共和軍）との戦いも強硬に推進しており、IRAメンバーによる北アイルランドでのハンガーストライキにも決して屈しなかった。

その意味においてサッチャーは、既にフォークランド戦争の前から「鉄の女」として強いリーダーシップを発揮していたのであり、いわゆる「フォークランド^{フックター}要因」については過大に評価されてはならないの

⁷² Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. II [War and Diplomacy] (London: Routledge, 2005), pp. 556-557.

⁷³ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. II [War and Diplomacy] (London: Routledge, 2005), pp. 584-585.

⁷⁴ マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、279頁。なお、アルゼンチン側の捕虜は約9,000名に上った。

であろう。

では最後に、サッチャーの戦時内閣とは何であったのかについて改めて考えてみよう。

第1に、戦時内閣は、①内閣全体の統一性を維持するため、②国家全体の統一性を維持するため、そして、③国際的な支持を集約するため、に上手く機能したと結論できる⁷⁵。

戦争の平和的解決を求めるのであれば、外交には、時間、対話、相互の妥協への意志などが必要とされる。他方、戦争での軍事的勝利を求めるのであれば、迅速性、決定力、そして力——軍事力——が必要とされる。実際、ノットは、フォークランド戦争を通じてこの2つの側面の間で生じた「固有の葛藤」について認めている⁷⁶。例えば4月下旬、軍事的な準備がそれまでの外交的進展に追い付くに従って、「政治」と「軍事」の位置付けがいわば逆転し始め、軍事的な要請が、外交に優越するといった事態が生じ始めたことは不可避であった⁷⁷。だが、それにもかかわらず戦時内閣は、この「政治」と「軍事」を架橋する制度として上手く機能したのである⁷⁸。

前述したように、戦時内閣に三軍参謀長ルウィンが「軍事顧問」として参加することによって、サッチャーはルウィンを通じて自らの方針をノースウッドの機動部隊司令部、フォークランド諸島に向けて展開する機動部隊及び上陸任務部隊、さらには、それらの下部部隊にまで確実に伝えることが可能になったのである。

そうしてみると、イギリスのフォークランド諸島奪還作戦の特徴とは、第1に、最終的な権限及び責任は戦時内閣にあるということであり、第2に、戦時内閣の統制を受けながらも作戦の実施そのものは、1956年のスエズ紛争での反省を踏まえて最も関連する軍種——つまり海軍——にある程度は任せるといったものであると言えよう。また、この戦争での指揮命令系統は、戦時内閣から国防省や外務連邦省などを経由することなく、直接、機動部隊司令部につながっていた。だからこそ、軍人からはこれを歓迎された一方で、時折、フォークランド戦争では軍事的合理性より政治的配慮が優先され、それが作戦に困難をもたらしている、との不満が出てきたのである。

サッチャーの戦時内閣が機能した第2の要因は、ここで交戦規定（ROE）を逐次定めることによって、軍部に対して文^{シビリアン・コントロール}民統制を課することが可能になったことである。

事実、戦時内閣が決定する交戦規定に関してノットは後年、以下のようにその利点を回想している⁷⁹。すなわち、例えば政治問題化したアルゼンチン巡洋艦「ヘネラル・ベルグラノー」に対する攻撃許可及びそのための交戦規定の変更は、「簡単に決まった。他に選択肢はなく、サッチャー、ルウィン、そして私（ノット——訳者注）で迷うことなく決定した。なぜなら、傍受した通信情報から、イギリス機動部隊に対し

⁷⁵ G. M. Dillon, *The Falklands, Politics and War* (London: Macmillan, 1989), p. 133.

⁷⁶ G. M. Dillon, *The Falklands, Politics and War* (London: Macmillan, 1989), p. 157.

⁷⁷ G. M. Dillon, *The Falklands, Politics and War* (London: Macmillan, 1989), p. 140.

⁷⁸ マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、239頁。

⁷⁹ John Nott, "Inside the War Cabinet," *RUSI JOURNAL*, Vol.152, April, 2007, p. 76.

てアルゼンチン海軍が挟撃作戦を行っていることを知っていたからである」⁸⁰。

これはまさに、「政治」が決断し、「政治」が責任を取るとの戦時内閣——さらには文民統制——の理念を明確に実証した事例であろう。

第7節 サッチャーの戦争指導

では以下で、戦争指導という観点からサッチャーのリーダーシップについて評価してみよう。

最初に、全般的な評価であるが、フォークランド戦争については、今日、以下の2つの相反する評価が存在する⁸¹。

第1は、この戦争がサッチャーと軍部によってイギリスを勝利に導き、長い自信喪失の時代から同国を救い出し、アルゼンチンに対する「正義の戦争」を行ったとする評価である⁸²。

こうした評価の中からサッチャーの「フォークランド要因」という言説が生まれてきたのであるが、確かに、イギリスが1956年のスエズ紛争、その後の「帝国からの撤退」、さらには経済不振によって自信喪失に苦しむ中で、この戦争での勝利が同国民に希望を与えたことは事実であろう。実際、サッチャーのイギリス保守党の支持率は戦前には33パーセントであったにもかかわらず、勝利の直後には51パーセントにまで上昇、また、フォークランド戦争を支持する割合は戦争直後に84パーセントにまで達し、これが翌年の総選挙での保守党の大勝利につながったのである。

第2は、第1の評価とは対照的にフォークランド戦争は政治家の利益に基づいた無益な戦争であったとの評価であり、その結果多くの兵士が苦しい戦いを通じて心的外傷後ストレス障害（PTSD）などの後遺症に苦しみ、かなりの人数が自殺に追い込まれた悲惨な事実注目する見方である⁸³。

この第2の見方には、第一次世界大戦及び第二次世界大戦に対するイギリス国内での評価と相通じるものがあるが、本論で確実に言えることは、多くの問題が生じ、また、多くの問題が残されたとは言え、外交を行いながら戦争を遂行し、戦争を行いながら外交を遂行するというサッチャーの戦争指導は、まさにクラウゼヴィッツの、「戦争は外交とは異なる手段を用いて政治的交渉を継続する行為に過ぎない」との戦

⁸⁰ サッチャーもその回想録で同様の見解を示している。マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、271頁。つまり、一部で囁かれたペルーの和平案をイギリスが意識的に潰すための手段であったとして「ヘネラル・ベルグラノ」を撃沈したとの説を、サッチャーは完全に否定しているのである。マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、272頁。

⁸¹ 三浦瑠麗著『シベリアンの戦争——デモクラシーが攻撃的になるとき』岩波書店、2012年、110～111頁。

⁸² Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. II [War and Diplomacy] (London: Routledge, 2005), pp. 728.

⁸³ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. II [War and Diplomacy] (London: Routledge, 2005), pp. 728; Panel Discussion: “Twenty Years On: The Falklands War in Perspective,” *RUSI JOURNAL*, June, 2002. フリードマンは、イギリス、アルゼンチンの双方で約1,000名の戦死者を出したフォークランド戦争が、「それだけの価値があったか」との問いを發している。また、フリードマンは、イギリスにとってのフォークランド戦争の成果と言えるものは、①フォークランド問題の政治的安定、②アルゼンチンの民主化、③サッチャー政権の継続（イギリス国内情勢の安定）、の3つであったと述べている。Lawrence Freedman, “Writing Official History: The Falklands Campaign”（2009年5月、防衛省防衛研究所主催セミナーでの発表論文）；Lawrence Freedman, “Airpower and the Falklands War”（2009年5月、防衛省防衛研究所主催セミナーでの提出論文）；Lawrence Freedman, “Writing Official History: The Falklands Campaign” 防衛省防衛研究所編『戦史研究年報』第13巻（2010年3月）。

争観をその教科書通りに行ったものである、との事実である⁸⁴。

また、フォークランド戦争は1980年代初頭にピークを迎えた「新冷戦」という戦略環境の下で勃発したが、サッチャーは西側陣営と東側陣営の対立という冷戦の枠組みの外にこの戦争を留め置くことに成功した。さらにサッチャーは、戦争を回避しようとするほど強硬策を取らざるを得ないという戦争と平和をめぐる逆説——パラドクス——に直面したが、この難問も上手く自らの戦争指導の中で解消したのである。

つまり、冷戦という文脈の下でのイギリスとアルゼンチンの領土紛争が、当事国間と国連安保理という枠組みの中に留まり、また、侵略に対する自衛権の発動という文脈に終始したため、これが政治的にも地理的にも局限化され、アメリカ及びソ連の過度な介入を伴うことなく、世界規模の対立にエスカレートしなかったのである。明らかにこれは、サッチャーの戦争指導の勝利と言える。

フォークランド戦争はまた、イギリスの「ソフトパワー」の強さを見せ付けた戦争であった⁸⁵。イギリスの支援に回った諸国の多くは、同国と正式な同盟関係を結んでいたわけではないが、長年にわたるイギリスの外交努力の結果として、同国に同情的あるいは好意的になっていたのである。

以上、総じてフォークランド戦争では、サッチャーのトップダウンの戦争指導が有効に機能した、と結論できよう。もちろん、先にも少し触れたように、はたして1980年代を通じて「フォークランド要因」がサッチャー政権の強固な基盤を維持していたかのか、については議論の分かれるところであるが、それでも、この戦争の成功によってサッチャーが、自らの政権基盤を強化し得たことは否定できない事実である⁸⁶。

次に、軍事の次元でのフォークランド戦争を総括してみよう。

詳細は第2部に譲るが、フォークランド戦争は1945年以降、初めての西側陣営同士の軍事力衝突であったと位置付けられるが、そこから得られた評価あるいは示唆には以下のような点が挙げられる⁸⁷。

第1に、この戦争はイギリスの職業軍人とアルゼンチンの徴兵軍人の戦いであった⁸⁸。最終的にアルゼ

⁸⁴ Stephen Badsey, “The Falklands War: Politics and Strategy” (2011年11月15日、防衛省防衛研究所主催セミナーでの発表論文)；Stephen Badsey, “The Falklands War: Strategy and Operations” (2011年11月16日、防衛省防衛研究所主催セミナーでの発表論文)；Stephen Badsey, “An Overview of the Falklands War: Politics, Strategy and Operations” 防衛省防衛研究所編『戦史研究年報』第16巻(2013年3月)。

⁸⁵ Stephen Badsey, “The Falklands War: Politics and Strategy” (2011年11月15日、防衛省防衛研究所主催セミナーでの発表論文)；Stephen Badsey, “The Falklands War: Strategy and Operations” (2011年11月16日、防衛省防衛研究所主催セミナーでの発表論文)；Stephen Badsey, “An Overview of the Falklands War: Politics, Strategy and Operations” 防衛省防衛研究所編『戦史研究年報』第16巻(2013年3月)。

⁸⁶ Paul Latawski, “Invoking Munich, Expiating Suez: British Leadership, Historical Analogy and the Falklands Crisis,” in Stephen Badsey, Rob Havers, Mark Grove, eds., *The Falklands Conflict Twenty Years On: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), pp. 230-231.

⁸⁷ 以下の点は、Panel Discussion: “Twenty Years On: The Falklands War in Perspective,” *RUSI JOURNAL*, June, 2002; Gordon Smith, *Battle Atlas of the Falklands War 1982* (Penarth, Naval History Net, 1989); Anthony H. Cordesman, Abraham R. Wagner, “The Falklands War,” in *The Lessons of Modern War*, vol. III (Boulder, CO: Westview Press, 1991); *The Falklands Campaign: The Lessons* (London: HMSO, 1982) などでの議論をまとめたものである。

⁸⁸ アルゼンチンの徴兵制度の欠点は、部隊が恒常的に初年兵訓練組織になることであった。また、編成部隊としての訓練は殆ど行われず、諸兵科連合作戦の訓練は全く行われていなかった。毎年、初めの数ヶ月間はとりわけ部隊の作戦能力が低かったが、まさにフォークランド戦争は、アルゼンチン軍の能力が最低のこの時期に戦われた。一方、イ

ンチンは約 10,000 の陸上兵力をフォークランド諸島に派遣することになるが、準備、装備共に不十分で、その約 30 パーセントは入隊したばかりの新兵であったとされる。そして、ここに徴兵の有用性という問題が出てくる。

第 2 に、この戦争は西側の兵器同士の戦い（両国共にアメリカ、フランス、ベルギー製の兵器を使用、アルゼンチン側にはイギリス製の兵器も）であり、兵器の実験場となった。実際、両国軍が使用した兵器の殆どが、それまでに実戦で用いられたことがなかったものである。

第 3 に、アルゼンチンが用いた空対艦ミサイル「エクゾセ」（及びシュペル・エタンダール機）が及ぼした衝撃の大きさである⁸⁹。その結果が、海上での戦いにおけるミサイル時代の到来との一般的な認識へとつながる。また、当然ながら戦後はフランス製兵器の質の高さに注目が集まった。

第 4 に、アルゼンチンが上陸作戦を開始した当初、これをアメリカの偵察衛星に完全に捕捉され、アメリカが作戦の中止を求めた事実象徴されるように、フォークランド戦争は衛星の有用性が認められた最初の戦いであった。

第 5 に、イギリスもまた、アメリカの偵察衛星の画像及び赤外線写真などでアルゼンチン側の配置や兵力をほぼ正確に把握していたと言われる。

第 6 に、アルゼンチンが多くのイギリス艦艇を撃沈した結果、早期警戒機の必要性が確認され、また、垂直離着陸（VTOL）機の有用性が確認された⁹⁰。加えて、艦艇に用いられるアルミ合金の脆弱性が確認された戦争であったとの説もある⁹¹。さらには、この戦争を通じて地対空ミサイルの有用性が認められ、それ以降のいわゆる非通常戦争で多用され始めることになる。

第 7 に、原子力潜水艦(SSN)にとっては初めての实戦であり、戦争を通じてその有用性が確認された。実際、イギリスの原潜が「ヘネラル・ベルグラノー」を撃沈した後は、アルゼンチンの水上艦艇が戦闘に加わることは全くなかったのである⁹²。同時に、対潜水艦戦の必要性が認識され、その影響は当時の海上自衛隊にまで及んだとされる。

第 8 に、フォークランド戦争はメディアを駆使したプロパガンダ——宣伝——の戦いであった。そこで

ギリス軍は朝鮮戦争や多数の植民地戦争、さらには北アイルランドでの紛争など多くの戦争及び紛争に参加しており、これらを通じて、第二次世界大戦からフォークランド戦争までの間、ほぼ継続的に実戦経験を積んでいた。Martin Middlebrook, *The Fight for the 'Malvinas': The Argentine Forces in the Falklands War* (London: Viking, 1989), pp. 49-52; Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. II [War and Diplomacy] (London: Routledge, 2005), p. 82.

⁸⁹ 駆逐艦「シェフィールド」への攻撃は、水上艦艇に対する新たな脅威、すなわち、目視外の距離から発射される空対艦ミサイルの脅威が顕在化した最初の事例であった。この戦争でイギリスはまた、輸送艦「アトランティック・コンペイヤ」も失っている。詳しくは、カーター・A・マイケイジアン（塚本勝也訳）「水陸両用作戦の歴史的变化」立川京一、石津朋之、道下徳成、塚本勝也編著『シリーズ軍事力の本質②シー・パワー』芙蓉書房出版、2008 年を参照。

⁹⁰ Lawrence Freedman, "Writing Official History: The Falklands Campaign" (2009 年 5 月、防衛省防衛研究所主催セミナーでの発表論文) ; Lawrence Freedman, "Airpower and the Falklands War" (2009 年 5 月、防衛省防衛研究所主催セミナーでの提出論文) ; Lawrence Freedman, "Writing Official History: The Falklands Campaign" 防衛省防衛研究所編『戦史研究年報』第 13 巻 (2010 年 3 月)。

⁹¹ マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993 年、上巻、273 頁。

⁹² 原子力潜水艦は隠密性が高いため、南ジョージア島で緊張状態が続く中、外交交渉に対する悪影響を避けたいと考えたイギリス政府が、予防的に先行展開させたものである。つまり、イギリスが原潜の派遣を決めた大きな理由の一つは、アルゼンチンを挑発することなく行動可能であるためであった。

は、VTR 技術を使ってほぼリアルタイムに情報を伝達できたとされる反面、いわゆる「大本営発表」の多さでも際立っている。

第 9 に、同盟国であるアメリカの支援を得たイギリスは、フォークランド戦争を通じて情報力の差では圧倒的であった。アメリカは友好関係にあるアルゼンチンとの関係に配慮しつつも、全面的にイギリスを支援することになる。例えば、空中給油機の提供を申し出ると共に、アルゼンチンが保有する自国製の兵器の情報を提供したようである。また、アルゼンチンの電話及び通信設備を敷設したのがイギリス系企業であったこともあり、情報が筒向けであったとの説も存在する。

第 10 に、アルゼンチンの隣国チリは、ビーグル海峡地域でアルゼンチンとの国境問題を抱えていたため、イギリスに積極的に基地の提供を申し出たとされる。

第 11 に、イギリス機動部隊及び上陸部隊のフォークランド奪還作戦は、いわば白紙の状態から計画しながらの遠征となったが、全体的な評価としては、上手く遂行できたというのが一般的である⁹³。だが、それでもいわゆる離島奪還作戦を成功裏に実施するための条件として、海上での行動の自由——制海権あるいは海上優勢——を確保した上で、上陸部隊が作戦を効率的に遂行できるための兵站支援を円滑に実施することが極めて重要であり、そのためには戦略的輸送能力、遠征艦隊などの防空能力、そして対潜水艦戦能力などが十分に発揮できる態勢を平時から確保することが必要である事実が確認された⁹⁴。

第 12 に、ヴァルカン機によるスタンレー空港への爆撃は戦果に乏しいものであった一方で、これによってイギリスは、アルゼンチン本土を空爆する能力を有することを示すことに成功した⁹⁵。実際、その結果としてアルゼンチンは航空機をフォークランド諸島の防衛のために集中させることができなくなったのである。もちろん、ヴァルカン機によるスタンレー空港の爆撃はまた、滑走路を破壊することによってアルゼンチン軍の航空機——ジェット戦闘機——を使用させないためでもあった⁹⁶。

第 13 に、この両国は共に制空権あるいは航空優勢の獲得に必要な条件（対空警戒能力、航続距離、機

⁹³ フォークランド戦争では、何よりも航空母艦を守ることが重要であると考えられた。なぜなら、仮に 2 隻の航空母艦のうち 1 隻でも失えば、奪還作戦自体が成立し得なくなると考えられたからである。Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. II [War and Diplomacy] (London: Routledge, 2005), pp. xxxii. Lawrence Freedman, “Writing Official History: The Falklands Campaign” (2009 年 5 月、防衛省防衛研究所主催セミナーでの発表論文) ; Lawrence Freedman, “Airpower and the Falklands War” (2009 年 5 月、防衛省防衛研究所主催セミナーでの提出論文) ; Lawrence Freedman, “Writing Official History: The Falklands Campaign” 防衛省防衛研究所編『戦史研究年報』第 13 卷 (2010 年 3 月)。

⁹⁴ フォークランド戦争当時のイギリスの「統合」の実態とは、各軍種間の統合というよりは、むしろそれぞれの軍種の NATO 諸国の海、陸、空軍との「連合」であった。詳しくは、Andrew Doman, Mike Lawrence Smith, Matthew Utley, “Jointery and Combined Operations in an Expeditionary Era: Defining the Issues,” *Defense Analysis*, Vol. 14, No. 1 を参照。

⁹⁵ Lawrence Freedman, “Writing Official History: The Falklands Campaign” (2009 年 5 月、防衛省防衛研究所主催セミナーでの発表論文) ; Lawrence Freedman, “Airpower and the Falklands War” (2009 年 5 月、防衛省防衛研究所主催セミナーでの提出論文) ; Lawrence Freedman, “Writing Official History: The Falklands Campaign” 防衛省防衛研究所編『戦史研究年報』第 13 卷 (2010 年 3 月)。

⁹⁶ スタンレー空港は、アルゼンチンに対するイギリスの政治的配慮もあって滑走路が 1,250 メートルしかなく、ジェット機は緊急離着陸の場としてしか使用できなかった。René De La Pedraja, “The Argentine Air Force versus Britain in the Falkland Islands, 1982,” in Robin Higham, Stephen J. Harris, eds., *Why Air Forces Fail: The Anatomy of Defeat* (Lexington: The University Press of Kentucky, 2006), p. 234.

数など)が欠如していたため、敵に対して決定的な打撃を与えることができなかった⁹⁷。

だが、第 14 として、フォークランド戦争後、イギリス軍兵士は言うまでもなく、時としてアルゼンチン軍兵士までもが「英雄」として扱われることがあるが、中には精神的な^{トラウマ}後遺症——PTSD——や、戦争の現実と自国の政治指導者の認識の溝に苦悩して、反社会的な行動を取ったり、日常生活が上手く営まれなくなった者すら存在する。実際、この戦争後にアルゼンチン軍兵士が毎年 20 名近く自殺しているとの報告があるほか、既に 280 名の元アルゼンチン軍兵士が自殺したとの報告もある⁹⁸。

以上、フォークランド戦争は、いわゆるミサイル時代における公海上の海軍の戦いの最初で、現在までのところ唯一のものであり、軍事の次元でも陸、空軍を含めて戦時はもとより平時からの政治による指導が勝敗を大きく分けた事例である。その意味において、今日でもこの戦争から得られる示唆は多々存在するように思われる。

だが、もちろん 1982 年以降、電子装置やその他の軍事技術は飛躍的な進歩を遂げており、フォークランド戦争での戦いの様相が、今日の戦いのあり方にどれほどの示唆を与え得るかについては慎重に検討する必要がある。

興味深いことに、1980 年代初頭のイギリスでは NATO という枠組みの下でソ連と戦うことだけを想定していたため、当初フォークランド戦争は多くの人々に、18 世紀及び 19 世紀の大英帝国の海軍の遠征とほぼ同様の印象を持たれたか、あるいは、イギリスの最後の植民地戦争として位置付けられた。何れにせよ、これは当時のイギリス国内の、さらには同国軍人の戦争に対する一般的なイメージとは極めて異なるものであった。

しかしながら、1980 年代末になるとフォークランド戦争は、イギリスはもとより世界各国で、短期型の、そして通常型の戦争を基礎とする「限定戦争」の一つの代表例として考えられるようになり、今日においては、ポスト冷戦期を特徴付ける介入型かつ遠征型の「新しい戦争」の初期のものとして評価されている⁹⁹。

以上が、軍事の次元におけるフォークランド戦争への評価であるが、ここで確認すべきこととして、人々の一般的な印象とは対照的に、フォークランド戦争での勝利は当時、必ずしも当然視されていたわけではなかった事実、また、その勝利はイギリス国内で熱狂的かつ高揚感をもって迎えられたわけではなかった事実である。とりわけ同国軍人に対しては、よく任務を果たしたといった程度の冷静な対応であった。

次に、サッチャーの戦争指導と国内の諸要因について考えてみよう。

最初に、戦時内閣の構成員が、ピム外相を例外として全てサッチャーの指示に従ったことは、サッチャ

⁹⁷ 島嶼の防衛を考える場合、制空権あるいは航空優勢を確保していれば、敵は侵攻できない。しかし、制空権あるいは航空優勢だけでは、敵が潜水艦で海上封鎖を行った場合、大きな戦略的空輸能力を持たない限り、島嶼に対する補給は全うできない。つまり、制空権あるいは航空優勢を確保し、対潜水艦戦を優位に進めなければ陸上での戦いで勝利を収めることは困難である。

⁹⁸ 『朝日新聞』2007 年(平成 19 年)4 月 2 日(月)夕刊及び『朝日新聞』2007 年(平成 19 年)4 月 3 日(火)朝刊。

⁹⁹ Peter W. Gray, "Air Power: Strategic Lessons from an Idiosyncratic Operation," in Stephen Badsey, Rob Havers, Mark Grove, eds., *The Falklands Conflict Twenty Years On: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), pp. 253-264.

一のリーダーシップの強さを端的に物語っている。

また、サッチャーは可能な限り外務連邦省を迂回し、さらには国防省にも諮ることなく、ルウィン三軍参謀長からの助言を求める外は、一人でこの戦争を指導する方法を選んだため、政治家や官僚、そして多くの軍人はその影響力を殆ど発揮できなかった。もちろん、はたしてこのサッチャーの政治手法が、戦争を指導する上で妥当であったか否かについては議論が分かれるであろうが、少なくともこの方法により、戦争を通じてサッチャーが強力なリーダーシップを発揮できたことは事実であろう。

その一方で、もちろん戦争指導の観点から残された問題点も多い。

例えば、イギリス軍人は文^{シベリアン・コントロール}民統制の強さだけでなく、社会とやや距離を置いた状態及び政治問題に対する自己抑制において際立っており、アメリカなどと比べれば政治家に対する軍人からの異論は表面化しない傾向が強い¹⁰⁰。それにもかかわらず、フォークランド戦争の指導方法をめぐってはとりわけ後年、サッチャーに対する軍人からの批判は根強い。また、近年のイラク戦争やアフガニスタン戦争をめぐってイギリス軍高官から政治家に対する厳しい批判が出たが、これは異例とも言える事態である。そして、これは戦時内閣、さらに一般的には国家安全保障会議のあり方や政軍関係のあり方が問われる大きな問題を提起しているのである。

さらには、BBC（英国放送協会）に代表されるメディアはフォークランド戦争を通じて、戦争批判というよりは、むしろ戦争の指南役を買って出ているとの批判が存在し¹⁰¹、これは戦争におけるメディアの役割とは何かについて考えるための大きな一石を投じることになった¹⁰²。

では次に、同盟国との関係においてサッチャーの戦争指導はどのように評価できるのであろうか。

アメリカはフォークランド戦争の第3の主要な「当事者」となったが、同国は当初、イギリスとアルゼンチンの紛争をどうにかして調停しようと試みていた。だが、結局は失敗、4月30日にはイギリスに対する支援を宣言することになる。この支援には軍事物資の提供などが含まれているが、これはまさに「英米の特別な関係」を示すものであった。

英米関係と日米関係はしばしば比較の対象とされるが、イギリスとアメリカには、民主主義国家という共通の価値やNATOの同盟国といった要素と共に、歴史、言語、文化などを通じて培われた「英米の特別な関係」があったことが決定的な役割を果たした。実際、アメリカの国防長官ワインバーガーは、アメリカはNATOの最も重要な同盟国のイギリスをアルゼンチンと同列には扱えない旨、イギリス側に伝えていたのである¹⁰³。

また、こうした政治の次元における「英米の特別な関係」についてはよく知られているが、実は、フォ

¹⁰⁰ 三浦瑠麗著『シベリアンの戦争——デモクラシーが攻撃的になるとき』岩波書店、2012年、129頁。

¹⁰¹ Max Hastings, Simon Jenkins, *The Battle for the Falklands* (New York: W. W. Norton & Company, 1997), pp. 291-292. 三浦瑠麗著『シベリアンの戦争——デモクラシーが攻撃的になるとき』岩波書店、2012年、126頁。マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、237頁。

¹⁰² 逆に、サッチャーはこの戦争を通じてメディアの報道のあり方に不満を持っていた。マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、234頁。

¹⁰³ マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、273頁。

ークランド戦争では軍事の次元、すなわちイギリスの軍人とアメリカの軍人の間に第二次世界大戦以降、確固とした「英米の特別な関係」が築かれていたことが、この戦争でのイギリスの勝利に大きく貢献したのである¹⁰⁴。実際、サッチャーが殆ど反撃の態勢が整わない時点で、あれほどまで迅速に軍事力行使を決定できた背景には、アメリカの軍事支援に対する期待があったからである。

サッチャーはその回顧録などで、アメリカによる調停努力が必要以上に中立的で間違っていたと批判する一方、それが国連など他のチャンネルからの介入を防ぐためには有用であったと述べている¹⁰⁵。確かに、アレキサンダー・ヘイグ国務長官による調停——シャトル外交——などは、今日から振り返れば、いわゆる「外交的空白」を埋めるためには上手く機能した。実は、アメリカは調停役の立場にしようとする限り、イギリスとアルゼンチンの双方に対して公平かつ中立的な立場を取らざるを得なかったのであるが、その実態は当初からかなりイギリス側に与していたのである¹⁰⁶。

加えて、レーガンはサッチャーに対して、「我々は領土問題に関しては中立であるが、アルゼンチンが武力行使を行った場合はその限りではないであろう」と、有事の際のイギリス支持を示唆していた¹⁰⁷。この事実は、日本の抱える安全保障問題を考える上で大いに参考となる。

また、確かにアメリカの政治家や外交官の一部には、この戦争に対する「公平な」アプローチを唱える者もいた¹⁰⁸。彼らによれば、従来、アメリカはフォークランド諸島をめぐるイギリスとアルゼンチンの紛争に対しては常に中立の立場を維持してきた。さらには、中央及び南アメリカにおけるアメリカの反共産主義の戦いにおいてアルゼンチンが大きな役割を果たしてきた事実に鑑みて、アメリカはこの戦争の局外に留まるべきとの強い議論も存在した。

こうした論者は、フォークランド戦争で仮にイギリスが勝利すれば、①アルゼンチン側をさらに過激にさせる、②ラテンアメリカ諸国との関係が疎遠になる、③ソ連に介入のための機会を与える、と危惧した¹⁰⁹。だが、イギリスは「英米の特別な関係」とサッチャーの巧みな政治手腕によって、こうしたアメリカ国内の中立論を抑え込んだのである。

では最後に、国際社会に目を転じてサッチャーの戦争指導について考えてみよう。

この戦争を通じて総じて国際社会は、イギリスに同情的あるいは好意的であった。時代は下って 1991

¹⁰⁴ 軍事の次元における「英米の特別な関係」については、John Baylis, *Anglo-American Defence Relations 1939-1980: The Special Relationship* (London: Macmillan, 1981); G. M. Dillon, *Dependence and Deterrence* (Aldershot: Gower, 1983) などを参照。

¹⁰⁵ Lawrence Freedman, "The Impact of the Falklands Conflict on International Affairs," in Stephen Badsey, Rob Havers, Mark Grove, eds., *The Falklands Conflict Twenty Years On: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), pp. 16-18.

¹⁰⁶ G. M. Dillon, *The Falklands, Politics and War* (London: Macmillan, 1989), p. 142.

¹⁰⁷ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. II [War and Diplomacy] (London: Routledge, 2005), p. 130.

¹⁰⁸ Lawrence Freedman, "The Impact of the Falklands Conflict on International Affairs," in Stephen Badsey, Rob Havers, Mark Grove, eds., *The Falklands Conflict Twenty Years On: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), pp. 16-18.

¹⁰⁹ Lawrence Freedman, "The Impact of the Falklands Conflict on International Affairs," in Stephen Badsey, Rob Havers, Mark Grove, eds., *The Falklands Conflict Twenty Years On: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p. 18.

年の湾岸戦争での連合国側——多国籍軍——の勝因を考えてみると、やはりそこにも国際社会の支援の重要性がうかがえる。繰り返すが、フォークランド戦争でイギリスを支援した諸国の多くは、同国と正式な同盟関係にはなかったが、長年にわたるイギリスの外交努力の結果として、同国に好意的な態度を示したのである。

またイギリスは、国際的な「正統性」の確保に十分にも配慮した。ここで「正統性」とは、合法性、道義性、そして民主主義の結合を示唆する¹¹⁰。その意味において、国連安保理決議第 502 号は、1945 年以降のイギリスが最も誇るべき外交的勝利の一つであると評価できる。なぜなら、ソ連ですらアルゼンチンに接近し過ぎることに躊躇し、拒否権を発動しなかったからである¹¹¹。

ちなみに、安保理常任理事国であるイギリスは、この戦争の最終段階で拒否権を一度行使したに過ぎず、また、核保有国であるにもかかわらずイギリスは、いわゆる「核の恫喝」を用いることもなかった。もちろん同国は、拒否権を発動することも核の恫喝を用いることもできたが、こうした行為は国際社会におけるイギリスのイメージを悪化させるため、最後の手段として温存された。なぜなら、あくまでもイギリスは、自国領土を不当に占領された被害者の役を演じなければならなかったからである。

ラテンアメリカ諸国も同様に、とりわけアルゼンチンの軍事的敗北が濃厚になるにつれて、同国との距離を置き始めた¹¹²。その意味では、サッチャーの強い政治的要請の下でのイギリスの継続的な軍事的勝利には、大きな意義があったのである。

そしてヴェルサイユで開催された先進国首脳会議（G7）で主要諸国がイギリスを支持したため、これで国際社会の動向は決定的なものになった。

おわりに

最後に、改めてフォークランド戦争を総括すれば、その政治的示唆として、①イギリス外交におけるフォークランド問題の優先順位の低さ、②イギリスとアルゼンチンのボタンの掛け違い、といった点が挙げられる。一方、この戦争が与えた軍事的示唆としては、①航空優勢や海上優勢といった戦争における古くからの鉄則の再確認、②統合作戦の重要性、③離島防衛に欠かせない兵器の存在、④同盟国の重要性、⑤C4ISR(Command, Control, Communication, Computer, Information, Survey, Reconnaissance)の重要性、⑥アルゼンチン側の準備不足と戦略の失敗、⑦イギリス側の準備不足、などが挙げられる。

これについては、それぞれ第 1 部及び第 2 部で詳述するが、フォークランド戦争から得られたさらなる

¹¹⁰ Lawrence Freedman, "The Impact of the Falklands Conflict on International Affairs," in Stephen Badsey, Rob Havers, Mark Grove, eds., *The Falklands Conflict Twenty Years On: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), p. 9.

¹¹¹ Lawrence Freedman, "The Impact of the Falklands Conflict on International Affairs," in Stephen Badsey, Rob Havers, Mark Grove, eds., *The Falklands Conflict Twenty Years On: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), pp. 20-21.

¹¹² Lawrence Freedman, "The Impact of the Falklands Conflict on International Affairs," in Stephen Badsey, Rob Havers, Mark Grove, eds., *The Falklands Conflict Twenty Years On: Lessons for the Future* (London: Frank Cass, 2005), pp. 18-20.

示唆として、狭義の意味での海軍ではなく、徴用船や商船海軍（マーチャント・ネイビー）などを含めた国家の総合力としてのいわゆるシー・パワーを構築する必要性が確認された¹¹³。

また、戦いの場が本土から離れている場合、正面装備はもとより、兵站支援能力の必要性、さらには、継戦能力の必要性を指摘したい¹¹⁴。とりわけ島嶼を奪還する側は、海上からの戦力投射能力、水陸両用作戦能力、いわゆる SLOC を維持する能力、そして、上陸後に橋頭堡を確保するための均衡の取れた陸、海、空の能力の重要性が証明された¹¹⁵。

国家戦略——外交及び政治——の次元ではそれ以上に、フォークランド戦争に代表される島嶼をめぐる紛争を事前に防止するための一つ的手段として抑止を機能させるためには、平時から十分な軍事力を備え、そして、必要となればそれを躊躇なく運用するとの政治指導者の確固たる意志の表明が必要であることも明らかになった。

さらにフォークランド戦争は、日米同盟のあり方を考える上で、さらには、島嶼問題を抱える日本の独自の防衛のあり方を考える上で、イギリスとアメリカの関係が多くを示唆を与えてくれるように思われる。実際、サッチャー自身もその回顧録で述べているように、「議論が尽きた後、誰が侵略者を排除するのかについては、何の幻想も抱いていなかった。それは我々に他ならなかったのである」¹¹⁶。

最後に、フォークランド戦争を通じてイギリスが外交的、そして軍事的勝利を収めた主たる原因は、やはり戦時内閣の存在である。

戦時内閣は、この戦争を通じて不透明かつ曖昧な状況の中で、上手く外交及び軍事における戦争指導を行った。その結果、①国際的には最も必要とされる組織や国家から支持が得られ、②イギリス政府全体の政治的一体性が維持され、③国民感情及びより高次の道徳的原則を基礎とした国内の支持を固める、ことにも成功したのである¹¹⁷。

確かにサッチャーは首相に就任した当時、フォークランド問題への展望を欠いていたためにフォークランド諸島を一時的に失ったのであり、その意味では、当初のサッチャーの外交及び政治手腕はあまり評価できない。しかしながら、フォークランド戦争中のサッチャーの対応は、諸島の奪還という明確な目的を掲げた上で、毅然としたものであった。本来であれば政権が瓦解しても不思議でない状況であったが、サッチャーは、戦時内閣の創設によって閣内の反対勢力を抑え、さらには、閣内の合意形成にも成功した。

113 シー・パワーの概念について詳しくは、立川京一、石津朋之、道下徳成、塚本勝也編著『シリーズ軍事力の本質② シー・パワー』芙蓉書房出版、2008年の特に第1章を参照。

114 いわゆるロジスティクスの重要性については、フリードマンが常に指摘する点である。Lawrence Freedman, “Writing Official History: The Falklands Campaign” (2009年5月、防衛省防衛研究所主催セミナーでの発表論文); Lawrence Freedman, “Airpower and the Falklands War” (2009年5月、防衛省防衛研究所主催セミナーでの提出論文); Lawrence Freedman, “Writing Official History: The Falklands Campaign” 防衛省防衛研究所編『戦史研究年報』第13巻(2010年3月)。

115 サッチャーが自らの回顧録でも引用しているように、やはりかつてフリードリヒ大王が述べたこと、すなわち、「武器なき外交は、楽器のない音楽のようなものである」、は正しいのであろう。マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、241頁。

116 マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、231頁。

117 G. M. Dillon, *The Falklands, Politics and War* (London: Macmillan, 1989), p. 167.

また、フォークランド戦争の公刊戦史の中でフリードマンは、政治による軍事の統制は、戦時内閣が定める交戦規定(ROE)によったと述べている¹¹⁸。つまり、戦時内閣と交戦規定は政治と軍事の架け橋としての機能を十分に果たすと共に、サッチャーに、イギリス本土から遠く離れたフォークランド諸島での複雑かつ危険な軍事作戦を政治的に統制する手段を与えたのである。そしてその際、以下の3つの原則が戦略上——政治と軍事の間——の葛藤を解決する役割を果たしたとされる。

第1は、十分な軍事的な圧力が外交交渉を成功させるための環境作りに資するとの認識である。つまり、フォークランド諸島の奪還を成功させるための環境作りの一環として、アルゼンチンに対して軍事力を使用することである。第2に、軍事行動は慎重に判断されなければならない、また国際法に違反することは避けなければならない。第3は、機動部隊の被害を最小限に留めることである。

そして、こうしてサッチャーの戦時内閣は、第二次世界大戦でのチャーチルの戦時内閣と同様に、成功した内閣として高く評価されているのである。

¹¹⁸ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. II [War and Diplomacy] (London: Routledge, 2005), p. 86.